

森の中の犬ころ

小川未明

青空文庫

町まちのある酒屋さかやの小舎こやの中で、宿無やとし犬いぬが子供こどもを産うみました。

「こんなところで、犬いぬが子こを産うみやがって困こまつたな。」と、主人しゅじんは小言こごとをいいました。これも、小僧こぞうたちが、平常へいぜい小舎こやの中なかをきれいに片かたつけておかないからだ、小僧こぞうたちまでしかられたのであります。

「この畜生ちくしようのために、おれたちまでしかられるなんて、ばかばかしいこつた。犬いぬの子こを河かわへ流ながしてきてしまえ。」と、小僧こぞうたちは話はなしをしました。

「そんな、かわいそうなことをするもんじやない。目めがあいたらどこかへ持もつていって捨すてておいで。」と、かみさんがいいました。

そのうちに、小犬こいぬたちは、だんだん目めが見みえるようになりました。そして、よちよちと、短みじい、筆先ふでさきのような尾おをふりながら歩あくようになりました。「どうか、もうすこし、子供こどもたちが大きくなるまで、ここにおいてください。」と、あわれな母おやいぬ犬いぬはものをいわなかわりに、目めで小僧こぞうさんたちに訴うえたのであります。けれどそれは許ゆるされませんでした。「だれか、もらいてがあるといいながな。」

「警察けいさつへつれていくと、一いびき三十銭せんになるぜ。君きみつれていかないか？」

「ばかにするな。晩ばんに、どこかへ、リヤカーに載のせて捨ててきてやろう。」と、小僧こぞうさんたちは、そんな話はなしをしていたのです。これを聞きいた、母犬おやいぬは、おどろきました。なぜなら、たとえしんせつそうに見みえる人間にんげんでも、そうしたことをやりかねないからです。

「私わたしも、はじめは、何なに不自由ふじゆうなく、かわいがられたものだ。それを、どういうわけか、いつからともなくきらわれて、私わたしは、ついに、おいてきぼりにされて、飼かい主ぬしは、どこへかいつてしまった。私わたしは、いまでも、その人ひとたちをなつかしく、慕したわしく思おもっているばかりでなく、ご恩おんを受けたことを、けつして忘わすれはしない。けれど、こんなことがあつてから、人間にんげんを信しんじていいものかわからなくなつた……。」と、母犬おやいぬは考かんがえました。

母犬おやいぬは、だれにも、氣きづかれないう間に、小犬こいぬたちをつれて、そこからほど隔へだたつた、ある森もりの中に引ひつ越こしてしまいました。

その森もりは、ある大おおきな屋敷やしきの一部いぶになつていたのです。破やぶれた垣根かきねからは、犬いぬばかりでなく、近きん所じよに住すむ人間にんげんの子供こどもたちも、ときどき、出で入いりをしました。秋あきになると、どんぐりの実みが落おちれば、また、くりの実みなども落おちるのであります。

母犬おやいぬと小犬こいぬが、この森もりの中なかにうつつたのは、まだ春はるのころでありました。人間にんげんの子こ供どもたちが、いたずらをしに、容よう易いに近ちかづかれないうように、いばらや、竹たけのしげつた一本ほんの

木の根のところ、穴を深く掘って、その中にすんだのであります。やっと、安心をした母犬は、かわいい子供たちを、かわるがわるなめてやりながら、

「ここなら、雨もあたらぬし、また、だれからも追いたてられたり、じやまにされたりすることもないだろう。私たちが人間になつくのは心の底からだけれど、人間は気まぐれで、捨ててもすれば、また、ちよつとしたことでも、ひどくなくつたりする。だから、人間をほんとうに信じてはならない。おまえたちは、ほかの犬たちのように、りっぱな小舎にすむことができず、また、おいしいものを食べられなくても、それをうらやましがってはならない。そのかわりお母さんが、いつでもなにかさかしてきてあげるから……。」

母犬は、よく小犬たちにいきかせました。

母犬は、自分が、空腹を感じているときでも、なにか食べ物を見つければ、すぐに子供たちのいるところへ持つてきました。また、途中で、なにかもの音がすると、それが、小犬たちのいる森の方からでなかつたかと、どこでも、立ち止まって耳をすましたのです。その間を、小犬たちは、穴の中から、首をのびして、母犬が、なにかうまいものを持つてきてくれるのを、いまかいまかと待つていました。そして、あまり、その帰りがおそいと、クンクンと、鼻をならし、また、低く悲しげにないたのであります。

これをききつけて、あわれな母犬は、大急ぎでもどりました。

「さあ、さあ、待たしてわるかった。今日はいままで歩いたけれど、なにも見つからなかったのだよ。私の乳をあげるから、これで、がまんをしておくれ。」と、自分のひもじさも、疲れもすべて、忘れて、三びきの小犬をふところに、母犬は抱いたのです。

ある日のこと、母犬の留守の間に、酒屋の小僧がやってきて、一びきの小犬をさらつてゆきました。

「いい犬の子があつたら、ほしいものだ。」と、頼んだ家がありましたので、そこへ持つてゆくつもりでありました。

母犬は、森の穴に帰つてみると、一びきの子供がいませんので、どこへいったらうと、心配しました。暗くなつても、まだ、小犬はもどつてきませんでした。母犬は、きちがいのようになつて、あたりをさがしまわりました。とうとう夜じゆう、かなしい声をたててなきあかしたのです。その声は町の方まできこえてきました。

「かわいそうに、もし人間が、自分の子供がいなくなつたらどんなだろう？」と、酒屋のかみさんは、思いました。

小僧さんも、またかわいそうに思つたのか、翌日、昨日さらっていった小犬を、もう

一度森どもりの中なかまでつれてきて、「おいしいものをたべさして、かわいいがってくださいるお家うちがあるのだよ。」と、母おや犬いぬに向むかつてよくさとしました。すると、その意味いみがわかったとみえて、母おや犬いぬは尾おをふって、もらわれてゆくわが子こをさびしそうに見送みおくっていたのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 8」講談社

1977（昭和52）年6月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「青空の下の原っぱ」六文館

1932（昭和7）年3月

※表題は底本では、「森《もり》の中《なか》の犬《いぬ》ころ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：藤井南

2015年12月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

森の中の犬ころ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>